

書評と紹介

百木 漠著

『アーレントのマルクス』

——労働と全体主義』



評者：橋爪 大輝

1 内容

本書は、政治理論家ハンナ・アーレントがどのようにマルクスを解釈したかを分析し、それによって「労働と全体主義」の親和性を解明することを旨としたものである。その中心的な課題は、評者のみるところ次の2点である。

①『全体主義の起源』（以下『起源』と略）と『人間の条件』（『条件』と略）のあいだのミッシング・リンクを接合し、その2著がもつ連続した主題をつきとめるという、発展史的な課題。

②「労働と全体主義」の内在的関係を明らかにするという、思想的課題。

この2つの課題を解くことは、むしろ相互に無関係なことがらではない。というのも「労働と全体主義」のうち、労働はアーレントが『条件』において主題的に探究したものであり、全体主義はいうまでもなく『起源』の中心テーマであるからだ。2著を発展史的に接続する作業は、そのまま「労働と全体主義」の関係を解きあかすことにつうじているのである。

著者はまず、第一章「『全体主義の起源』と『人間の条件』のあいだ」で、『起源』の初版公開後にアーレントが開始したマルクス研究を、彼女が遺した草稿を手掛かりに追跡している。『カール・マルクスと西欧政治思想の伝統』の名で呼ばれる草稿群をもとに著者が主張するのは、マルクスは近代以降の労働のありようを正しく捉えつつも、同時に労働を賛美する思想を彫琢してしまい、アーレントはこの労働賛美を批判したのだ、という次第である。また、労働・仕事・活動の区別をはじめとして、のちの『条件』で主に分析されるさまざまなカテゴリーが、先の草稿ですで見いだされていたことが示される。著者はこの草稿群を蝶番にして、『起源』と『条件』を一体的に論じようとするのである。

第二章「アーレントとマルクスの労働思想比較」では両者の労働概念が対比され、それぞれが浮き彫りにされる。アーレントは労働を、あくまで動物としての人間が抱える生命の必然性を充足する営みに過ぎないと捉え、マルクスがそうした労働を賛美することを批判する。だが、ここに実はアーレントの「誤読」がある、と著者は指摘する。マルクスはいかなる労働をも賛美したわけではなく、「疎外された労働」と「アソシエイトした労働」を区別したうえで、後者をこそ人間の本質を形づくるものとして、回復しようとした。この本来の労働は、社会性や創造性などを含む豊かなものなのである。マルクスの労働は、アーレントのいう仕事（人間的・道具的世界を作りあげる営み）や活動（複数的な意見や言葉のやりとり）をも含むうるということだ。

しかし、このことでアーレントの批判は無意

味にならない。なぜなら彼女は、労働に生命維持以上の価値が含まれてしまう事態を批判しているからだ。著者はこうした事態を「労働のキメラ化」もしくは「肥大化」と呼ぶ。労働が仕事や活動を含みこむとき、仕事や活動にまで生命の至上性という価値が浸透していく。著者によれば、しかしこの生の必然性の瀰漫は、全体主義の予兆なのである。

第三章「労働・政治・余暇」では、「労働からの解放」という論点をめぐってふたたびアーレントのマルクス読解が取り上げられる。彼女は、マルクスが労働を賛美しながらその廃止を遠望していることを「はなはだしい矛盾」と言う。さらに、労働が廃止されたのちの社会にあっては、政治が官僚的な「事物の管理」となり、人びとが政治から解放されるとマルクスが捉えていることを、彼女は強く批判するのである（もっとも、著者によればこれらも「誤読」なのだが）。ではなぜ彼女はこうした「労働解放」論を批判するのだろうか。それは、労働から解放されたときに生まれる余暇が、脱政治化された「消費」に一元化されてしまっているからなのである。ナチス・ドイツが余暇をも国民的一体性の強化に利用したことからも分かるように、こうした脱政治化した消費もまた全体主義につうじていると、著者は指摘している。

第四章「『社会的なもの』の根源」では、アーレントにおける「社会的なもの」の概念が再検討される。彼女はそれをきわめて危険視した。だがそのさい「社会的なもの」に彼女が込める特異な含意を押さえないと、その真意を測ることができなくなる。「社会的なもの」とは、彼女によれば近代において公的領域と私的領域の区別が曖昧化し、成立したものである。私的領域は彼女にとって生命＝自然が養われる領域であるが、その生命＝自然が本来の領域たる私的領域を越えて拡張し、人為的な世界（公的領域）

に浸食すること、これが彼女の恐れたことだった。つまり彼女は「社会的なもの」の背後に自然的なものを見ていたのである。著者はここで「自然的なもの」の「不自然な成長」というアーレントの表現に着目する。自然が公的領域にあふれてくるとき、従来は循環的であった自然が不自然な成長、すなわち無限の膨張をはじめ。それと同時に、政治もまた生命（自然）を経営する全体主義的な「生政治」（フーコー）へと変貌を遂げる。彼女が危惧したのはこうした事態だったのである。

その危険が歴史的・具体的に描きとられるのが、第五章「『余計なもの』の廃棄」である。第五章は、資本主義と全体主義の連続性を明らかにする、本書の白眉ともいべき章である。本章で著者は『起源』を分析し、アーレントがルクセンブルクなどのマルクス主義系の帝国主義論を参照しつつ、帝国主義を資本主義の発展形態と理解していることを示す。資本は自己増殖の運動を続けるなかで、国内市場の有限性につきあたる。そのとき、資本を増殖させるものであった「余剰」が、「過剰資本」と「過剰な労働力」という「余計な überflüssig もの」へと転化し、成長の阻害要因となってしまう。資本の運動は、この「余計なもの」を処理するために、国家の暴力を後ろ盾に植民地拡大へと膨張していき、「過剰資本」はそこに投資先を見だし、「過剰な労働力」はそこに活躍場所を見だすのである。とはいえ、このように「余計なもの」を価値増殖に振り向けることが可能だったのは、すでに多くの海外植民地を獲得していた国々（イギリス・フランスなど）だけであり、後発の帝国主義国（ドイツ・ロシアなど）はこうした手だてを取ることはできなかった。では後者は「余計なもの」をどう処理したか。著者によれば、「人種主義イデオロギー」によってそれを排斥する、という手だてが取られたのであ

る。そしてここで、帝国主義もまた、「人間を『余計なもの』にするシステム」としての全体主義に変性し、「余計なもの」を「最終廃棄」する。著者はこのようにして、資本主義が膨張・蓄積を繰り返すなかで帝国主義へと変容し、最終的に全体主義と化す過程をアーレントにそくして再構成したのである。

残る二章で著者は、よりポジティブなアーレントの構想を示そうとする。

著者は、アーレントにおける「労働者」像の変化を跡づけることによって、その糸口を探る。第六章「〈労働する動物〉に『政治』は可能か？」で、著者は、アーレントが『条件』で意外にも労働運動に肯定的な評価を与えているという件から論を説き起こす。意外にもというのは、彼女は労働をあくまでも生命の必然性に縛られたものであると見ており、労働する限りの人間は〈労働する動物〉に過ぎず、政治や活動の自由を持ちえないと考えていたはずだからである。著者はそこで、1956年のハンガリー革命という「出来事」において、労働者たちが評議会をみずから構成したという事実が、彼女に態度変更をうながしたのだと推理する。そして、利害関心に捕われた〈労働する動物〉と、そうした利害を越えて「公共の事柄」に参加しうる「労働者」を区別することで、アーレントを再読する可能性へといざなうのである。著者はその後『革命について』へと検討対象を移し、人びとがみずから政治に参加し、活動することができる評議会制度が、彼女の理想とする政治制度であったことを明らかにした。エリート主義とも捉えられているアーレントの政治理論は、決して労働者を政治空間から排除する議論ではないのである。

もうひとつ、アーレントの政治構想において重要であり、そして全体主義に抗するという意味あいでも重要なのが、著者によれば「仕事」

である。終章「『労働』から『仕事』へ」であらためて確認されるとおり、彼女は仕事を、「使用対象物」を製作し「世界」を形成する営為として、たんなる生命維持としての労働から区別している。仕事作りだす耐久性のあるものは、一方では私たちが活動するための舞台をしつらえ、他方では私たちの活動を記録し、記憶にとどめる役割を果たす。著者は、労働・仕事・活動のいずれをもまんべんなく重視する「三角形バランス」を強調し、そのためには従来のアーレント研究であまり着目されてこなかった仕事を再検討する必要があると展望を示し、擱筆している。

2 評価と論点

評者は冒頭、本書がふたつの課題をもっていると述べた。①『起源』と『条件』の接続、②「労働と全体主義」の内在的連関の解明、の2点にほかならない。著者は、マルクスという補助線を引くことによって、これらの課題を果たした。②について先に言えば、彼によれば資本家は労働力商品という特殊な商品を買ひ、それを使用することで価値の増殖を果たす。資本主義—帝国主義—全体主義をつらぬく価値増殖の論理と、労働のあいだのつながりが、マルクスの導入によって鮮明化する。労働は全体主義の膨張運動の核心にビルト・インされているのだ。これは同時に①の課題に応えるものでもある。というのも、『条件』の労働論には、『起源』では未解明だった全体主義の膨張の核心を明らかにする意義があったことが示されたからである。

彼女の労働論は、活動や政治に関する議論に比べて注目されることが少ない。著者によるこの解明は、アーレント研究の落丁を埋めるものだろう。また、従来「誤読」とされてかえりみられなかった彼女のマルクス解釈に光を当てた意味も大きい。そのさい、誤読を認めずにアー

レントの正当性を教条的に叫ぶのではなく、それを認めたくて彼女の批判の本質的な意義を探る、という方法は、マルクス以外の彼女の思想家受容を研究するさいにも、範となる姿勢であると評者には思われた。著者は、こうした姿勢によって、議論をマルクス研究者にも開いたのだ。

とはいえ、本書については疑問もいくつか浮かぶ。2点に限って示しておきたい。

(1) 第一の疑問は、アーレントはマルクスを誤読していることにならないのではないか、というものである。ただし、「マルクスの労働概念の評価」に限ってのことであるが。著者の論を順番に見ていこう。まず、アーレントはマルクスが労働を賛美したことを批判していた。しかし、マルクスの労働は単純に生命維持的ではなく、アソシエイトした労働のような多面性を含んでいた。このことを彼女は見逃しており、彼女は誤読しているというのが著者の判定だった。

しかし、その一方でマルクスのように仕事や活動の要素をふくんだ労働概念は、多義性をはらんでしまった近代以降の労働のすがたを、かえって的確に描きとったものともなっている、と著者は指摘する。ここから、著者のアーレント評価はかなり入り組んだものになる。というのも、彼女の労働・仕事・活動の区別の眼目は、近代以降、あらゆる人間の営みが労働に画一化されてしまった事態（労働のキメラ化）にたいして、上記の分節化を回復させることにあった、と著者は主張するからである。

しかしだとすると、アーレントはマルクスの労働概念を誤解していたにもかかわらず、結果的にはそれを正しくとらえた批判を遂行していた、ということにならないか。アソシエイトした労働のことを知らずに、アソシエイトした労働を射抜いていた、ということになるからである。そうすると彼女の批判がマルクスを射当て

ているのはたんなる偶然ということになりそうだが、むしろ誤読はなかったと解するのが自然ということはないのか。

(2) 2点目として、評者としては、著者の（解釈するアーレントの）労働概念はなお曖昧さをふくんでおり、さらなる哲学的な掘り下げの余地があるように思われる。

著者は第二章で、労働と仕事を生産物の差異という観点からいったんは特徴づけている。すなわち、労働とは「消費財」を生産する行為であり、他方仕事は「使用対象物」を作りあげるのだという。だが著者は、ショーン・セイヤーズや石井伸男の批判を受けるかたちで、生産物によって諸行為を区別するのはやめ、なにが労働でなにが仕事をあらかじめ決定することはできないと留保を加える。では労働と仕事をどう区別するのか。著者によれば「ある行為が、生命（生活）維持のために必然的に行われるならばそれは『労働』であり、世界の安定性と永続性を維持するための製作として行われるならばそれは『仕事』であるということになる」（本書101頁）。だが、この区別は問題を含んでいないだろうか。

というのも、「生命維持のために行われる」ことや「世界の安定性と永続性を維持する」という規定はあまりに抽象的であり、具体的行為の分類には役に立たない可能性があるからである。食糧を生産するとか食事を作るということであれば、直接生命維持に資すると限定できるかもしれないが、著者の例示では「机を作る」行為でも、それが生命維持に役だてば労働となる可能性があるという。こうなると、労働の肥大化やキメラ化を危惧するにしても、そもそもなにが「労働」行為なのか特定できない恐れがある。同じ行為が両方の規定に該当してしまう可能性もある。労働のような基本概念をめぐる哲学的ロジックの精度は、議論全体の成否を

も左右する可能性があるのではないだろうか。

この点は、著者がキメラ化した労働に対する処方箋として提示した「労働・仕事・活動の三角形バランス」にも影響を及ぼす。著者によれば、現代では1人ひとりが労働・仕事・活動をすべて担っている以上、労働のキメラ化はすでに進行しており、身分秩序を再興するのでもないかぎりこれらの行為を分担することは不可能であるという。そこで著者が終章で提示したのが「三角形バランス」である。だが、労働や仕事が上のようなかたちでしか区別できないとすれば、それらのあいだでバランスを取ることは

ほとんど不可能ではないのか。

評者としては、以上の2点を疑問点として示したうえで、評を終えたい。

(百木 漠著『アーレントのマルクス——労働と全体主義』人文書院, 2018年2月, 338頁, 定価 4,500円+税)

(はしづめ・たいき 二松學舎大学非常勤講師)

【注記】

本稿は一部、日本アーレント研究会開催の「アーレントはマルクスをどう読んだか——百木漠『アーレントのマルクス』合評会」(2018年12月2日, 於・京都大学)における報告に基づく。